



Title	自己愛と複数の自分らしさに関する臨床心理学的考察
Author(s)	竹田, 駿介
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81978">https://hdl.handle.net/11094/81978</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 竹 田 駿 介 )

論文題名	自己愛と複数の自分らしさに関する臨床心理学的考察
------	--------------------------

## 論文内容の要旨

本論文は、複数の自己と自己愛との関連を明らかにし、その背景理解を的確にし、心理臨床的なアプローチを考慮する研究である。複数の自己を使い分ける手法は、これまでは現代において適応的であるといわれてきた。その手法により自己のなさや主体性のなさを感じることはこれまで研究で指摘されてきたものの、複数の自己を使い分ける手法や自己愛について焦点を当てた研究はほとんどされてこなかった。

そのため、本研究では複数の自己に関連する先行研究をレビューし、質問紙によって複数の自己を使い分ける手法が自己愛的な対処方略であることを明らかにした。インタビュー調査によって、自己を複数使い分けている人の内的世界を明らかにした。加えて、自己愛に関する実証研究領域には精神分析的な理論を背景に発展したことを背景に、精神分析的な自己に関する理論を概観した。

また、水準ごとに事例を見ていき、複数の自己を自己愛的に用いることの背景に傷つきや無力感があることを明らかにした。この傷つきや無力感があるために、無力感を感じる自己を否認しておかなければならなかった。その部分を受容していくことはとても痛みをともなう。痛みを扱っていくために映画を題材として、心理臨床において他者を受け止める態度が見ておきたくない自己と自分自身との関係を見るために必要な能力であると論じた。

最後に調査研究に見られた、自己のプロセスがこれまでみてきた事例にみられるかを検討し、心理臨床家がどのようにかわっていくことが可能であるかを論じた。他者と出会い、傷つく可能性をセラピストの方が先に受容することで、クライアントの病理性を排除せず、見ていく場を形成することが必要であると論じた。

本論文全体における課題として、精神分析的理論を中心に論じていたことや、対象の範囲が限定的であったことを論じた。今後の展望として、主観的体験を他の学派でも検討することや、経験年数なども加味した縦断的な研究を実施していく必要性について触れた。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 竹 田 駿 介 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	老松 克博
	副 査	教 授	野村 晴夫
	副 査	准教授	綿村 英一郎

## 論文審査の結果の要旨

価値観が多様化するなか、現代の青年においては、場面に応じたさまざまな自己を使い分けるのが適応的なあり方とされている。しかし、他方、そこに自己の不確実感や主体性の乏しさが伴うことも指摘されてきた。本論文は、さまざまな自己を使い分けるあり方の背景要因として自己愛の働きという観点を導入して、その成り立ちや適応的側面と不適応的側面の関連を解明し、潜在する対人関係の困難への臨床心理学的対応を探究した野心的試みである。3部、12章（および序章と終章）から成り、2つの実証研究と4つの事例研究をもとに論じている。

第1部（第1～4章）では、第1章で複数の自己に関する先行研究をレビューしたうえで、第2章の量的研究において、大学生に対する質問紙調査により複数の自己の立ち現れ方の把握を試みている。そこでの、自己複雑性（Self-Complexity, SC）、自己愛類型、自我同一性の関連についての統計的分析から、肯定的SCによる一見適応的な対処方略がかならずしも自我同一性に裏付けられた安定性をもっていないことがわかる。

第3章はインタビュー調査である。複数の自己の使い分けと対人関係に関する体験を尋ねて、さまざまな自己の生起と変遷をM-GTAで質的に検討し、そこにある葛藤を抽出しつつ自己概念の変容プロセスをモデル化している。すなわち、複数の自己は、成育歴上の困難感から過剰な同調性や傷つきへの恐れなど外界への自己愛的な内的構えが形成されることを背景とするが、痛みを伴う自己理解によってそれに気づくと、対人関係における試行錯誤はじまり、他者から受け入れられる経験を通して自身を受け入れられるようになる、という説得力あるモデルである。

第2部（第5～11章）は4つの事例研究から成る。第1部の実証研究の結果が臨床レベルの問題にどの程度妥当か、事例研究でより包括的に検証したものである。自己愛の実証研究が精神分析理論から発展してきた経緯をふまえ、第5～6章で当該理論を概観したうえで、第7～9章のさまざまな病態水準の臨床事例に考察を加えている。さらに第10章では近年人気を博した映画を事例研究的に読み解き、臨床の知見を社会的文脈のなかで確認している。

事例研究から得られた知見の概要は以下のとおりである。どの病態水準のクライアントも、傷つきや無力感を受け入れ難いがゆえに複数の自己を複雑に使っているが、そのことを適切に理解してまとまりある自己として存在するのは難しく、自己愛的な関係性でしか他者とつながれない。心理臨床家が関わっていくには、他者との出会いによる傷つきをクライアントより先に経験し受容することが必要となる。そうしてクライアントの病理性を排除しないよう努めれば、クライアントが痛みを伴う自己理解をなしうる場を形成できる。この指摘は事例研究の積み重ねがあつてこそその臨床的示唆に富むもので、上記の実証研究の結果とも照らし合わせられている。

最後の第3部（第12章）では、以上の調査や事例から得られた知見を総括し、複数の自分らしさと自己愛をめぐる研究の今後の展望や課題を論じている。

本論文は、近年ますます関心を集めるようになった自己の複数性と自己愛の問題とのあいだに本質的なつながりを見出し、複合的な方法論と切り口を通して決定的な位置づけを与えた労作と言ってよい。論文審査の結果、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。